

大森 藤ノ
OMORI FUJINO

イラスト ヤスダスズヒト
YASUDA SUZURITO

ダンジョンに
出会うのは
間違ってる
8

を求めよう
だるま
田うか



プロローグ
進撃の軍神

イラスト・デザイン
ヤスタスズヒト

——ラキア王国軍、出兵。

その報せは近隣諸国に瞬く間に伝わった。

重厚な甲冑を纏う兵士、鎧を装着された何百何千という馬、曇天の下で鈍い輝きを放つ何万という長槍。国境沿いを進軍する武装した大行列が、多くの商人、旅人達によって目撃されたのである。

ラキア王国。

大陸西部に位置する君主制国家。被治者の数は六十万を超すと言われ、王都には巨大な王城と城下町が存在する。緑豊かで肥沃な大地を有するこの国は、いわゆる『軍事国家』という野蛮な側面を持っていた。

全ては君主である筈の王の上に君臨する、一柱の神の神意によるものだ。

『軍神アレス』。

事実上の一国の頂点であり、国を統べる男神。

とどのつまり、ラキア王国の正体とは数ある派閥の属性の中でも最大の規模と最大の繁雑さを持つ、国家系【ファミリア】である。

兵士、軍人は全て『神の恩恵』を授かった眷族、戦闘員であり、産業を営み国を支える民は非戦闘員と言える。唯一無二の主神アレスの王権神授によって歴代の王——派閥の団長——も選ばれてきた。

アレスと僅かな団員から始まった小さな【ファミリア】は、長い時間と苦勞を経て建国するまでに至り、歴史ある王国として存続しているのだ。

好戦的な神の意志によって王国は遙か昔日より幾度となく戦争を繰り返してきた。今回の出軍も、戦好きな主神の手によって引き起こされたというのが周辺各国、他都市のもっぱらの見解であった。

行軍する兵士のその数、三万。

とある『魔剣』の恩恵によりかつて不敗神話さえ誇っていた軍隊が向かう先は、大陸西部から更に西へ進んだ、大陸の片隅。

世界に一つしか存在しない巨大なダンジョンを保有し、今日では『世界の中心』とまで言われ発展した迷宮都市、オラリオである。

巨大な市壁と天を衝く白亜の巨塔を指し、近付いていく何万もの軍靴の音。
重厚な鎧に身を包んだ豪傑のエンブレム、紅の軍旗がはためく。

西進を続け押し寄せてくる大軍はオラリオ周辺地域でもとうとう観測された。

突然のラキア王国侵攻に対し、彼の迷宮都市は——。

「さあ安いよー!? 巨黒魚が一匹丸ごと二〇〇〇ヴァリス、二〇〇〇ヴァリスだ!」

「武器の整備、専用装備作製、何でもしまーす」

「誰かオレの派閥に入ってくれませんかあああああああああああああああ!」

「ふむ、その娘の冒険者よ、この回復薬をやるう。その美しい顔に傷など残ったらかなわんであろう」

「あ、ありがとうございまひゅ……!?!」

「またミアハが無自覚に女の子を誑し込んでるぞおーっ!?!」

「!!!」ミアハならしやうがない!!!」

——何も変わらなかった。

遙か西方の曇天とは無縁な晴れた青空が広がり、うららかな日差しを浴びる都市の住民達は、動じる素振りを欠片も見せない。

普段通り賑やかな生活を送っている彼等は、ただ心の声を一つにしていた。

『ああ、またか』

終始平和そうな光景が広がる都市の彼方、市壁外部の遠方からは、開戦を知らせる悲鳴のよな声々が木霊していた。

軍馬の嘶きが轟く。

すぐに続くのは草原を蹴りつける激しい馬蹄の音だった。

オラリオから真東に三〇Kに進んだ大平原、軍旗をはためかせる無数の騎馬が幕進する。

戦場の華とも言える騎兵隊。甲冑で身を固める騎士と鎧を装備した軍馬は進路上のあらゆるものを蹴散らし粉砕する。それは多大な突破力を秘めた戦場の大槍に相違ない。

槍衾のごとく前方に構えられた馬上槍が日差しを反射し銀の輝きを放つ。

戦場で遭遇すれば歩兵が一樣に恐怖する、そんな無敵の騎兵隊は——怯えていた。

鉄兜の下で青ざめている騎士達の視線の先、軍馬の突撃の前に立ちはだかるのは、一人のドワーフである。

隆々とした肉体に厚い重装、その鎧の上にはマント。

目深に兜を被り、大戦斧を携えている。

前方より押し寄せる蹄鉄の音に彼はその規格外の得物を構え、間合いが十Mを切った瞬間、迫りくる騎兵隊に突撃した。

真横に引き絞られた大戦斧を、真一文字に大雑する。

「ぬううん!!」

次の瞬間、無敵の騎兵隊は吹っ飛んだ。

『ぎゃあああああああああああああああああああああッ!?!』

上空に舞う騎士と軍馬。嘘のような光景が大平原に広がる。

騎士達はまるでこうなることがわかっていたかのように、青い空を仰ぎながら涙を散らし、外れた兜や悲鳴を上げる馬とともに大地へと落下していく。騎兵隊前部が崩壊したことで後方

から続く軍馬は勢いの止まった先鋒に次々と衝突し、転倒を繰り返していった。

瞬間に部隊総崩れとなる戦場に、一振りの斧をもつて騎兵達を蹴散らしたドワーフ——

「ロキ・ファミリア」所属ガレス・ランドロックは、大きく嘆息する。

「全く、フィンをやつめ……面倒事を押し付けおつて」

懲りずに突撃してくる別働隊、第二、第三騎兵隊にもはや溜息も出てこない中、ガレスは
まなじり 毗を吊り上げ大戦斧を構え直す。涙目を浮かべる騎士達はほどなくして、先程と全く同じよ
 うに豪快に宙を舞った。

オラリオ第一級冒険者、ガレス・ランドロック。

Lv.6の【ステイタス】を持ち、世界に名を轟かせるドワーフの大戦士。

対する王国の騎兵隊の【ステイタス】はほぼLv.1、数人の部隊長がLv.2であるのみ。
 技と駆け引き、ましてや戦術をいくらつぎ込もうが覆せない圧倒的なLv.の、能力の差。
 この突撃がいかに無謀であるか王国の騎士達もはつきりと悟っていた。

——戦鬨、とりわけ人同士の戦争において、数をもつて圧倒する時代は終わりを迎えた。

現代、俗に言われる『神時代』は、『量より質』の時代と言われている。

たった一人の豪傑が——神に与えられし『恩恵』を昇華させた戦士が——いとまたやすく
 戦況を覆す可能性を秘めているのだ。現に昇格した十名の小隊ならば、百の敵軍、あるいは
 千の軍勢すら真つ向からならば押さえ込むとまで言われているほどである。

そんな法則の中でもLv.6となれば、『古代』に地上へ進出し暴れ回った怪物と同等か、遙
 かそれ以上の実力を備えているに等しい。

つまり、王国軍の瞳にはガレスが古のドラゴンのごとく映っている。

そして、『英雄』の存在しない万軍が竜に敵わないのは、真理だ。

英雄譚、お伽噺の展開をなぞるのごとく、有象無象の兵士達はドワーフの大戦士一人にこ
 とごとく再起不能にされていた。

「ティオネ、銅鑼を鳴らせ。後退している敵の第一軍は囷だ、背後から回り込んで味方と挟
 撃」

「はいー」

「あと、丘の上に恐らく魔導士達……砲撃部隊がいる。ティオナ、気付かれないよう包囲して
 制圧するよう【ガネーシャ・ファミリア】に伝令しろ」

「はあーい……ああ、伝言ばつかで暇あー」

ガレスが暴れ回る大平原から離れた広野、絶叫が引つ切りなしに飛び交う主戦場。

長槍を携える【ロキ・ファミリア】団長、小人族のフィン・デイムナは遙か後方から複数の
 戦域の動きを見極め、指示をいくつも飛ばしていた。

攻め寄せてきた総勢三万の王国軍に対し、オラリオは仕方なしに応戦。管理機関の命令——
 強制任務が発令され、都市に属する特定の【ファミリア】はこれの迎撃に当たっていた。

初^{しよ}っ端^{ばな}から数にものを言わせ総攻撃を仕掛けてきた敵に、ひとまず団結して対応することになったオラリオ仮連合は総指揮にフィンを据えている。迷宮攻略最前線に立つ派閥首領はダンジョンの異常事態を見抜く洞察力、そして指揮力をこころも發揮し、敵軍の万事を粉砕してのけていた。

「団長、一部の【ファミリア】が言うことを聞かないです……特に【フレイヤ・ファミリア】「僕達は複数の組織を寄せ集めただけの烏合^{うごう}の衆だ。簡単な戦況を伝えて、後は任せておけばいい。【フレイヤ・ファミリア】は心配するだけ無駄だろう」

「フィン、東方より敵の増援だぞうだ。どうする？」

「シー……それより北の森が臭うな。リヴエリア、すまないけどアイス達を連れて向かってくれ。恐らくそっちが本命だ」

訝^きえない男性団員に友軍の放置を命じ、王族^{ハイレキ}の魔導士に指示を告げる。右手の親指を舐^なめるフィン^{フィン}は未来予知のごとくあらゆる敵の戦術、戦略を予見してみせた。

【ロキ・ファミリア】以外の派閥、多くの冒険者達も泣き喚^{わめ}く敵兵を斬り伏せては部隊を壊滅させていく。それぞれの首が意識を持つ多頭竜^{ヒドドラ}のように、オラリオ仮連合は広野に布陣した王国軍を蹂躞^{じゆうけん}していった。

「退屈ね……」

「うち、やることあるんやけどなあー」

指揮を務めるフィン達の更に後方、小高い丘の上では召集された【ファミリア】の主神が集まっていた。

各々^{おのおの}テントや椅子^{いす}を用意させる神々の中、豪華な神座に腰かけ葡萄酒^{ワイン}を飲むフレイヤ、同じく神座の上で胡座をかくロキが、視線の先で練り広げられる一方的な戦闘を眺めながら、盛大に暇を持てあましていく。

「もう、馬に乗っている時点で、ね」

【ステイタス】が育った子供の方が速く走れるしなー。カッコ付けたいのかは知らんけど、成長してないってこと自分から伝えてどうすんねん」

周囲にいる他神達も緊張感なくだらけ切っており、似たり寄ったりである。

本営もといこの神宮には少数の護衛団員、そして各派閥の団旗が風にたなびいていた。特に【ロキ・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】の団旗——冒険者達の部隊にも掲げられている道化師^{トリックスター}と戦乙女^{いくさ乙女}のエンブレムは、目にした王国^{キングダム}の兵士達を戦慄^{せんりつ}させる。

萎縮^{いしよく}した敵軍の動きは精彩を欠き、突撃にはまるで勢いが無い。名高き迷宮都市最強派閥の記号は存在するだけで相手の士気を大きく低下させていた。

「逆に言えば、うちらが出てこなければ何かつや何かつや相手をつけ上がらせる、と……。はあ、最大派閥つちゆう肩書きも面倒なだけやなあ」

「何を今更」

辟易しながら頭の後ろで両手を組むロキに、フレイヤは目を瞑って笑った。

「ところで……王国にも戦死者が一人も出てないと聞いているけど、どういうこと？」

「しようがないやん、商業系の連中が金ヅルを殺すなー、ゆうてるし」

フレイヤの問いにロキがうんざりと答える。

わーわーギャーギャーと阿鼻叫喚の巷と化している戦場を見つめながら、オラリオの冒険者達は全て峰打ちしていることを告げた。

「それに、こんな戦争ごっこで【ファミリア】の子の手を汚しとうないわ」

「それもそうね」

茶番であると言いつつながら、ロキは欠伸を噛み殺す。

「アレスのアホも、力の差がわかるとるんやから攻めてくるなっちゅーに」

色んなもん搾り取られるだけやろう、と朱髪の神は彼方にある敵陣地に視線を飛ばした。

「さあさあ軍人さーんっ、今ならオラリオ製の回復薬が一〇〇〇ヴァリスだよー!」

次々と怪我人が運び込まれてくる王国軍陣営は、盛況であった。

無数の天幕が立ち並び、寝かされる負傷者達の呻き声がかかる中を、兵士でもない亜人、そして神々が闊歩する。

敵兵の制止を振り切り、あるいは隙を突いて侵入してきたオラリオ所属の商業系【ファミリ

ア】が、派閥の品々を売り込んでいた。

「痛いだろう、苦しいだろう？ その傷、早く治したいだろう？」

「な、治したいです……!」

「よしっ商談成立だ!」

スタボロの兵士を見つけては清々しい笑顔で回復薬を売りつけるオラリオの男神達。

所属都市ではなく敵軍に自製品を横流しする彼等の商人魂はたくましい。ここぞとばかりに利益を上げようとする。

「武器が壊れたら戦はできない、さあ買うんだ!」

「物々交換でも構わないぞー!」

「フハハハハハハッ!? どうだミアハッ、我々の商品はここでも馬鹿売れだア!! どうやらまた儂の勝ちのようだなあ、なあアミッドよ!」

「いえ、ディアンケヒト様。ミアハ様達は元々こちらにいらつしやいません」

「なにイツ!? 臆したかア、ミアハアアアアアアアアアッ!」

武器や防具、挙句には『魔剣』まで。

様々な商品と取り交わされる金品はまさに特需と言えるものであり、欠片も被害が出ていないオラリオ側が一方的に潤っている。補給路と兵站を冒険者達に真つ先に潰させた商人達も物資を売り込んでくる中、主神の神意を全うするには彼等の施しを受けるしかない軍上層部の

責任者達は、泣く泣く大金を支払っていった。

「ちつ、碌な雄がいけないね……やつぱり將軍級じゃなきや駄目か」

「アイシャヤー！ あつちの本陣に活きのいい騎士達がいてさ、食っちゃまおうぜー！」

「お、待つてなサミラ、今行くよ！」

行軍には付きものとはかりに娼婦達の姿も存在した。歓楽街からやつて来た無所属の美女達が商売のために兵士達を誘惑し、あるいは獷猛なアマゾネス達が屈強な騎士達を貪り食い、喜悅の声を通り越した悲鳴がそこかしこで巻き起こる。

もはや好き放題に振る舞うオラリオの住人達によって、王国軍の陣営は一種のお祭り騒ぎと化していた。

「ほ、報告します!? 第一軍から第五軍まで壊滅し、前線の兵達は軒並み潰走中！ こちらの配置が見抜かれているかのように、全ての作戦も失敗に終わり……」

「おつ、おのれええ……!?」

——陣最奥、最も大きな幕舎の中では、一柱の男神が拳を握り締めていた。

獅子を彷彿させる光り輝く金髪に真っ赤な鎧。精悍かつたくましいその容貌は『美の神』に迫るものがあり、まさに美丈夫と言うに相応しい。

今回の戦争もとい抗争勃発の張本人、ラキア王国——【ファミリア】の主神アレスである。椅子に腰かける彼はもたらされた兵の報告に歯を噛み締め、その相貌を盛大に歪めた。

「陣営にもオラリオの金の亡者どもが跋扈しています！ アマゾネスの娼婦達に誑かされ、兵士の風紀は乱れに乱れている有り様で……我が軍の士気はガタガタです!!」

「オラリオオ——ッ!? 搦め手とは卑怯なあ~~~~~~~~っ!?」

装着している鎧と同じく顔を真っ赤に染めるアレス。ロキがこの場に居合わせたなら「そんなことするかボケ」と返答されただろう言葉を口にしながら、憤激に満ちる。

掲げる主義は『闘争本能』、周囲の評価は『猪突猛進』。

他神から頭まで筋肉であると称される主神の怒れる姿に、側にいる副官の青年はほとほと疲れたように肩を落とし、大きな溜息を吐き出す。

軍神、あるいは闘神アレス。

彼は戦の神ではあったが、勝利を司る神ではなかった。

既に敗戦濃厚となっている空気に、幕舎内の将校達は一様に口を閉ざし、男神の怒声のみが響いてく。

「今回は悪巧みしなくていいのですか?」

——とある軍神の咆哮が打ち上がる同時刻。

戰場から遙か離れた迷宮都市を囲む、巨大市壁上部では、純白のマントを風であおられる美女——【ヘルメス・ファミリア】首領アスファイが、己の主神に声を投げかけた。

遠方から上る『魔法』と思しき黒い煙を目視する男神は、胸壁に寄りかかりながら答える。「アレスのところはベル君をけしにかけてもなあ……」

優男の笑みを今ばかりは苦笑に変えるヘルメスは、橙黄色の髪を揺らしながら。風で飛ばされないよう被っている旅行帽を押さえた。

「それはそれで面白そうなことも起きるだろうけど……流石にフレイヤ様の反応が怖い」

「……あれからフレイヤ派の接触が？」

「いや？ ただ何も言われないことが、もう次はないっていう警告みたいなものだしなあ」

歓楽街であった事件の騒ぎが冷めやらない中、彼の派閥を刺激するような命知らずな真似はできないとヘルメスはアスファイに向き直る。

派閥壊滅なんて冗談じゃないですよ、という眷族の半眼の眼差しに、わかっているさ、と主

神は肩を竦めてみせた。

「ギルドに交渉して、ヘスティア達には間違っても召集がかからないようにしてある。しばらく事件続きだったからね、たまには羽を伸ばしてもらおうさ」

胸壁に背中を寄りかからせながら、ヘルメスは抜けるような青空を仰いだ。

「け、【劍姫】!?」

「【劍姫】だ!!」

『逃げるオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ?!!』

そして、主戦場である広野の北部。

森にひそんでいた奇襲部隊が、剣士の少女が目の前に現れた瞬間、一瞬で戦意を喪失した。部隊長の制止の悲鳴虚しく、歩兵達は武器を放り捨て逃走していく。

「まあ、そうなるだろうな」

「だから前が出るなつっただろう、アイズ。つたく、追うのが面倒くせえな」

「……」

リヴェリア、そして狼人のベートの言葉に、剣を構えていたアイズ・ヴァレンシユタインは口を閉ざし、項垂れた。

目立ち過ぎる金髪金眼の容姿はあまりにも鮮烈であり、その正体を容易に敵軍へ知らせしてしまう。階層主を単独で撃破した『戦姫』を恐怖する兵士達の反応に、少女は感情の乏しい表情で、確かに落ち込んでいた。

「アイズ、ほさつとすんな、追うぞ。近隣の村に野盗紛いの狼藉を働かれては堪らん」

「……うん」

「さっさと片付けてオラリオに帰んぞ。時間の無駄だつての」

追撃のため走り出すリヴェリア、ベート、他の団員達に続こうとするアイズは、駆け出す直前に背後を振り返る。

南西の方角には、白亜の巨塔がいつもと変わらない姿で天高くへと伸びていた。

後に『第六次オラリオ侵攻』と呼ばれる王国の軍事行動。

常より長引くことになる戦争の中で、迷宮都市はありふれた日常を過すぎしていった。神々と眷族達は、誰の目にとまることもない、ささやかな物語を紡つむいでいく。

一章 とある武神への恋歌



『命、ここにいたのか』
夢を見ている。

肌寒い寒空、枯れた木の根もと。
幼い自分が膝を抱えながら座り込んでいる光景を前に、命はこれが過去の記憶であると気付いた。

『どうした、腹でも減ったか？』

膝におでこをくっつけ、顔を上げようとしないうさな命に、現在と何も変わっていない角髪
のタケミカヅチが声をかける。

故郷である極東、住まいであった社の裏手で、二人だけの声が響く。

『……タケミカヅチさま』

顔を上げないまま、幼い命が幼い声音をこぼす。

目の前でしゃがみこんだタケミカヅチに、口を開いた。

『どうして命には、父上と母上がいないのでしょうか……』

孤児だからだ。

今の命ははっきりと答えることができる。

戦災、疫病、そしてモンスター。

子が親を失い天涯孤独になるのは極東ではそう珍しいことではない。むしろ身寄りを失った

後、タケミカヅチ達の社に迎えられた命はまだ運のいい方であった。
——連れていってもらったのは賑やかな村祭りだったか。

——それとも船が停泊する港街、あるいは都だっただろうか。

桜花や千草達とともにタケミカヅチ等神々が連れ立った場所で、この時の命は仲睦まじい
親子の姿を見て、気付かない振りをしていた寂寥感に耐えられなくなってしまったのだ。

『……命を産んでくれた父親と母親は、俺達にお前を預けて、天に還っていった』

『もう、あえないのですか……？』

『そうだな……命が生きている内は、下界に戻ってこれないかもしれない』
両親の魂が生まれ変わるのには、数十年も、何百年も先かもしれない。

タケミカヅチが言外に告げる意味をまだ理解できない幼い命は、ただ会えないということ
を肯定され、体を強張らせた。

『寂しいか？』

幼い命は首を縦に振ることも、横に振ることもできなかった。

ただ腕を掴んでいる手に力を込め、何かが溢れ出さないように指を食い込ませる。

小刻みに体を揺らし始める少女を前に、地面に膝をつくタケミカヅチは。

出し抜けに、その体を軽々と頭上へ持ち上げてみせた。

脇の下へ手を入れられ視界が高くなった命は、驚きながら男神を見下ろす。

『命、俺の娘になれ』

そして、涙の溜まった瞳を見開く命に、タケミカツチは笑いかけた。

『えっ………？』

『いつかお前に俺の恩恵をくれてやる。そうすれば、お前は俺と神血を分けた歴とした父子家族——眷族だ』

『かぞく……ファミリア』

その響きは甘美なだけでなく、悲しみに暮れていた命の胸に温もりを与えた。

それは赤ん坊のように自分を持ち上げ、見上げてくるタケミカツチの瞳に、己の子供に向けられる確かな慈しみがあつたからだ。

『病は気から、そして気は体から。俺の持論だ。お前が寂しさなんて感じる暇がないくらい、俺が武術なり何なり教えてやる。だから安心しろ、命。そして覚悟しておけ』

呆然とする幼い命にタケミカツチは勝手に言つて、子供のように笑つた。

『命は、父親や母親と何をしたかった？』

次にはまた優しい眼差しを浮かべ、正直に言えと尋ねてくる。

『……み、命は、父上に肩車をしてもらいたかったです』

『すぐにしてやる。他には？』

『ふ、ふとんの中で、さびしくないよう一緒に寝たかったです』

『よし、今夜だな。他には？』

『せんじつの都で見た、こつ、金平糖と一緒に食べてみたいですよっ！』

『お、おう。任せろ』

高級な御菓子の要求に、タケミカツチは笑みを引きつらせる。

常に社は貧乏であつたにもかかわらず、後日、彼は桜花や千草達も連れて命との約束を守つた。お互いに侘しい服を着ながら、神と子は視線を絡ませる。

『だが、まあ、俺が嫌だつたら女神や他の連中の眷族でも——』

『タケミカツチさまがいいです!!』

彼の言葉を遮つて、幼い命は大声で叫んでいた。

頬を赤く染めて、青紫の瞳でじつと見つめながら。

『……そうか』

瞬きを繰り返していたタケミカツチは、やがて破顔する。

命を地面に下ろし、頭を思いつ切り撫でてきた。

その大きな手に命はくすぐつたそうに目を瞑り、一粒の涙をこぼす。

すぐに肩車をされ、自分を探っていた桜花や千草達、神々のもとへ二人で笑いながら戻つていった。

この日からタケミカツチは父親となり、命は親愛を抱いた。

そしていつしか、その想いは恋慕の念へと変わることとなる。



「……」

命はゆっくりと臉を開いた。

窓の外のおつすらとした光と小鳥の囀りが、夜が明けたことを教えてくる。

懐かしい記憶に心を透明にさせながら、天井を見上げる命は、気付けば顔を綻はせていた。追憶に浸りながら敷かれた布団から体を起こすと、すう、すう、と。

自分のものではない静かな寝息が聞こえてくる。

すぐ隣を見れば、狐人の少女——春姫が別の布団で仰向けに寝ていた。

【イシユタル・ファミリア】の一件を経て、再び手を取り合うことができた同郷の少女に笑みを漏らす。彼女を起こさないように、命はその美しい金の髪と狐の耳をそつと撫でた。

【ヘステイア・ファミリア】ホーム、『竈火の館』の一室。

改宗した派閥の中で、命と春姫は三階にある二人部屋をあてがわれていた。

寝台はなく極東風の調度品が多い室内は、もともと大陸様式の造りの部屋と上手く釣り合いが取れていないようにも見える。部屋の隅に置かれる衣桁には鮮やかな着物と極東風の

戦闘衣がかけられていた。

夢から覚め、住み慣れた社は遠ざかり、代わりに今ある居場所が意識を覚醒させていく。

絆を取り戻した幼馴染の寝顔を二頻り眺めた後、命は徐々に明るくなっていく窓の外に目を向けた。

「……よしっ！」

清々しい朝の訪れに、命は体をぐつと伸ばした。



「春姫殿、配膳をお願いしますか？」

「は、はいっ！」

ホームの大食堂に香ばしい匂いが漂っている。

隣接している広い調理場では、黒髪を結わえ前掛を装着した命が野菜を切っては魚を焼き、木杓子で鍋をかき回していた。

ときばぎと朝食を作る彼女の声に、ばたばたと音を立てる春姫が何度も食堂を往復し、食器や料理を食卓へと運んでいく。

「春姫殿、あまり無理をなさらなくても……」

「い、いえつ。私も眷族の一員にならせて頂きました。どうかやらせてください、命様」
 春姫の格好は着物姿ではなく、何とメイド服である。

リリが懸念していた館の管理役、家政婦に春姫は入団直後自ら——「お仕事をやらせてください」と——希望を申し出たのだ。

貴族の生まれ、更に五年間の娼館暮らしで危なっかしくはあるものの、彼女は積極的に掃除や給仕などの仕事に慣れようとしていた。黒の仕事着と白い前掛、太い尻尾とともに揺れる長いスカートで、命は微笑ましそうに見送る。

都市の外では王国軍とオラリオの【ファミリア】連合が開戦している中。

団員数及び規模拡張直後ということを考慮され、ギルドから召集がかかっている【ヘステイア・ファミリア】には、平和な日常風景が広がっていた。

「わあ、いい匂い……」

「今日は命君が当番か。この香り、道理でね」

「あ、ベル殿、ヘステイア様。おはようございます」

汁物を小皿にすくい味見しつつ、命は調理場に顔を出す少年と主神に挨拶した。

【ヘステイア・ファミリア】の食事当番は一日ごとの交代制となっている。よっぽどことがない限り、主神も含めたその日の食当番が二人ないし三人で食卓の準備を進めるのだ。

ヴェルフならば火を通しただけのいわゆる男料理、リリならば材料をぎりぎりまで抑えた節

約料理など、それぞれの性格や調理の腕が食卓には表れるが、この命の料理に限っては【ファミリア】全ての者から『美味い』と太鼓判を押されている。

故郷の社で幼い頃から千草達女性陣とともに炊事場を切り盛りし、限られた食材を様々な工夫と知恵で料理と呼べる代物に昇華させてきた彼女の料理の腕前は、その真面目な人柄やもとの素質も相まってか、ジャガ丸くん愛好家の女神をして唸らせるものであった。

「命さん、この鍋の……えつと、茶色いスープって……?」

「これは味噌汁です」

鍋を覗き込むベルに答える。

出し汁に味噌を溶かした極東の伝統料理だ。普段はベル達に合わせパン等を主食にしたオラリオ主流の食事を用意する命だが、先日都市南西部にある交易所で味噌をたまたま発見し、久しぶりに作ってみようと思いついたのである。

故郷の料理、故郷の味だと説明しベル達にも味見させると、彼等の頬はたちまち緩んだ。

「何だか、ほっとしますね」

「うん、美味しいよ。これが命君達の郷土料理ってわけだ」

故郷の料理の好評を受け、命もまた頬を緩めて嬉しく思った。

ベルとヘステイアは笑いながら少女のことを褒め称える。

「命さん、本当に料理が上手ですね」

